

## 「多文化子ども」プロジェクト2017年度の活動 —— UNESCO ユースセミナー「多様性とインクルージョン」の開催について——

小貫 大輔\*<sup>1</sup>・星 久美子\*<sup>2</sup>

### 1. はじめに

東海大学の教養学部は、2015年に「ASPUnivNet（ユネスコスクール支援大学の全国ネットワーク）」に加盟するにあたり、教養学部の中に「UNESCO ユース事務局」を立ち上げた。以来、在学生と卒業生が協力していろいろな活動を繰り返してきたが、中でも毎年力を入れてきたのが「UNESCO ユースセミナー」という多文化共修<sup>1)</sup>の集いである。文化的、言語的、民族的な意味で様々な背景を持つ若者たちが集まり、「地球市民とは何か」、「持続可能な開発とは何か」について学び、考えてみようというセミナーだ。近隣都県のユネスコスクール加盟校や加盟希望校、インターナショナルスクールや民族学校などの外国（人）学校<sup>2)</sup>などの高校生とそれぞれの学校の教員、そして本学の大学生、留学生や卒業生が、毎回あわせて70人ほど参加し、1泊2日の時間を共にしている。

2017年度の「多文化子ども」プロジェクトは、このセミナーを中心に据えて構成した。芸術学科、人間環境学科、国際学科の教員が協力して教える「人間学1」の授業では、「そもそもユネスコスクールとは何か」から始め、このネットワークが重視する「地球市民教育（GCED）」や「持続可能な開発のための教育（ESD）」、そして日本に外国学校が存在することの歴史的・社会的背景や、海外における移民の子どもに向けた教育政策について取り上げた。また、音楽教育、美術教育、自然環境教育の視点から参加型教育活動のアイデアを紹介するなどもした。

そして「人間学2」の授業では、いよいよ学生たちにこのセミナーの企画・開催に携わってもらい、開催後は冊子『ユネスコスクール・ネットワーク——持続可能な社会を作るために』<sup>3)</sup>でセミナー報告などの執筆に協力してもらった。以下の項では、2017年度の「UNESCO ユースセミナー」の様子を報告したい。最初に、このセミナーに参加する学校と生徒たちの多様な背景について説明した上で、2017年度のセミナーの概要と実際におこなわれたプログラムの内容を詳しく紹介する。

---

受理日2018年11月28日

\*1 教養学部国際学科教授 \*2 東海大学 UNESCO ユース事務局代表

## 2. 多様な参加校を引き合わせる ―多文化共修にむけて―

「UNESCO ユースセミナー」の特色は、ユネスコスクール加盟校・加盟希望校と外国学校の高校生たちが出会い、ともに学びあう「多文化共修」の場であることだ。本報告の筆者の一人でUNESCO ユース事務局代表の星（2010年度国際学科卒業生）は、外国学校を積極的に訪問してセミナーについて説明し、高校生や教員たちの参加を呼びかけてきた。本学の学生サークル「ベイジョ・メ・リーガ」<sup>4)</sup>のメンバーたちも、普段から交流のあるブラジル学校に参加を呼びかけている。また、横浜シュタイナー学園<sup>5)</sup>というオルタナティブ学校がユネスコスクールの一つとして参加していることも、セミナーの多様性に幅を加えている。

そういった地道なネットワークづくりが実って、毎年のセミナーには実に多様な学校から高校生や教師たちが参加するようになった。セミナー参加者のおよそ3分の1はユネスコスクー

表1 UNESCO ユースセミナーに参加した高校生、大学生、教員の所属する学校の名前

|                              | 2015年度   | 2016年度   | 2017年度  | 2018年度   |
|------------------------------|--|--|---|--|
| 《大学》                         | 東海大学<br>玉川大学   | 東海大学<br>玉川大学   | 東海大学  | 東海大学<br>桜美林大学  |
| 加盟校<br>ユネスコ<br>《高校》          | 神奈川県立<br>有馬高等学校<br>学校法人湘南学園<br>NPO法人<br>横浜シュタイナー学園         | 神奈川県立<br>有馬高等学校<br>学校法人湘南学園<br>NPO法人<br>横浜シュタイナー学園   | 神奈川県立<br>有馬高等学校<br>学校法人湘南学園<br>NPO法人<br>横浜シュタイナー学園                            | 神奈川県立<br>有馬高等学校<br>学校法人湘南学園<br>NPO法人<br>横浜シュタイナー学園<br>学校法人自由の森学園   |
| ユネスコ<br>《高校》<br>スクール<br>未加盟校 | 学校法人<br>シュタイナー学園<br>横須賀市立<br>横須賀総合高等学校<br>神奈川県立<br>小田原高等学校 | 学校法人<br>シュタイナー学園<br>横須賀市立<br>横須賀総合高等学校<br>学校法人自由の森学園   | 学校法人<br>シュタイナー学園<br>神奈川県立<br>小田原高等学校  | 学校法人<br>シュタイナー学園<br>横須賀市立<br>横須賀総合高等学校<br>神奈川県立<br>小田原高等学校<br>NPO法人<br>シュタイナーズスクール<br>いずみの学校   |
| 《外国<br>学校》                   | Escola Opção<br>(ブラジル学校)                                   | Escola Opção<br>(ブラジル学校)<br>神奈川県立<br>Horizon Japan<br>International<br>School<br>British International<br>School<br>横浜山手中華学校<br>横浜中華学院 | Escola Opção<br>(ブラジル学校)<br>神奈川県立<br>Horizon Japan<br>International<br>School | Escola Opção<br>(ブラジル学校)<br>神奈川県立<br>Horizon Japan<br>International<br>School<br>学校法人ティー・エス学<br>園(ブラジル学校)<br>Instituto Educare<br>(ブラジル学校) |
| 《その他》                        | 横浜市立永田台小学校   |  |   |  |

ル加盟校や加盟希望校、および上で述べたシュタイナー学校の高校生である。それとほぼ同数が参加するのが、インターナショナルスクールや民族学校など、外国学校の高校生である。これまで、ブラジル学校、朝鮮学校、中華学校、そして様々な背景を持つインターナショナルスクールから生徒や教員の参加をえている。そして残りのおよそ3分の1が、本学をはじめとする大学の学生や大学院生、卒業生、留学生などである。セミナー参加者の所属する学校の名称は表1にまとめた<sup>6)</sup>。

外国学校からの参加者の中には日本語が不得手な人がいると同時に、2つ以上の言語をこなす参加者も多く参加している。そのため、司会進行は日本語と英語、そしてポルトガル語の3言語で進めるように努め、グループディスカッションでは、参加者同士で協力して通訳できるようにうまくメンバーを割り振っている。日本語から英語、英語からポルトガル語という2重の通訳が必要なこともあるが、何とか言語の壁を乗り越えた話し合いが成立している。2017年度のセミナーではカナダ大使館から講師を迎えたため、英語での講義を国際学科卒業生の協力で日本語に逐語訳するとともに、ブラジル学校からの参加者のためには、別の国際学科卒業生がポルトガル語でのウィスパーリング通訳をした。

言語、文化を超えた若者たちの出会いは印象的であるが、同様に重要だと感じるのが生徒を引率する教員同士の出会いである。教員には高校生とは違う宿舍（本学の教職員宿舍）を提供しているが、夜遅くまで語り合っている部屋もある様子である。私立、公立、NPO 立の学校の教員がお互いに出会うことはまれであろうし、外国学校の教員と知り合う機会はさらに貴重な機会ではないだろうか。

### 3. 2017年度 UNESCO ユースセミナーのプログラム

2017年の UNESCO ユースセミナーが開催されたのは10月28日（土）から29日（日）にかけての2日間であった。参加者は、本学湘南キャンパスの学生活動用宿泊施設（クラブハウス）に宿泊した。教員には、本学の教員用宿泊施設（松前会館）に宿泊いただいた。

セミナーでは、毎年一つのテーマを選んで様々な角度から掘り下げている。2015年は「未来の学校について考えてみよう」、2016年は「多様化・多文化化する日本の学校」がテーマだった。第3回目となる2017年度は、「多様性とインクルージョン」をテーマに、カナダ大使館から講師を迎え、日本の多文化共生の実状についてカナダの多文化主義の実践と比較しながらディスカッションをした。

以下では、2017年度のセミナーの詳しいプログラムを紹介する。

#### 《アイスブレイク》

2日間のセミナーのはじめに、まずは緊張をほぐすための簡単なアイスブレイクを学生グループ「ベイジョ・メ・リーガ」の主導でおこなった。知らない者同士が集まるセミナー会場の雰囲気が、身体を使った言語のいらぬワークによっていきなり明るくなるのを誰もが感じたことと思う。

### 《竹のアートと音楽のワークショップ》

続いて「竹のワークショップ」。講師は数学者であり竹の造形作家である日詰明男氏で、「黄金比を感覚で体験する」ワークを2種類おこなった。一つは長さ2mの竹で編む「スター・ケイジ」の制作。もう一つはある数列を元に竹を叩いて奏でる「フィボナッチ・ケチャック」の演奏。スター・ケイジの複雑な構造や、西洋音楽とは異なるケチャックのリズムに参加者は戸惑いつつも、魅惑されているようだった。

### 《自己紹介ゲーム：好きなものビンゴ》

名前も国籍も、お互いのことをまったく知らない状態の中、どんな人が今ここにいるのかを把握していくゲームを自己紹介の代わりにおこなった。日本語、英語、ポルトガル語で9つの質問を書いた「ビンゴ」のシートを使い、たくさんの人と一対一で知り合っ、ゲームに沿って相手の「好きなもの」を発見していく。お互いのTシャツに絵の具で答えを書くことで、真っ白だった自分のTシャツが最後にはカラフルな答え（出会った相手の「好きなもの」）で埋まるしくみになっている。

### 《学校紹介クイズ》

写真を使って自分たちの学校を紹介する「学校クイズ」を高校生たちが事前に用意し、チームごとに回答して得点を競い合った。クイズの例としては、ユニークな学校行事や、ブラジル学校の給食の献立などが出題された。

### 《「多様性とインクルージョン」に関する講演》

カナダ大使館からクリスティーン・カラハンさんを迎え、カナダにおける「多様性とインクルージョン」の状況について講演していただいた。カナダは、1971年、世界に先駆けて「多文化主義」の政策を打ち出した国である。フランス語圏と英語圏のカナダ国民だけでなく、カナダの中に存在する様々な民族グループ、そしてファースト・ネーションズ、イヌイット、メティスといった先住民族の人たちの文化的権利を尊重することに、政府が本気でコミットしたということだ。当時の首相はピエール・トルドーという人で、現首相のジャスティン・トルドーの父親である。

講師の話からは、この政策が時間とともに進化してきたことがよく理解できた。現在は、「多様性とインクルージョン」というキーワードのもと、LGBTQ<sup>27)</sup>をはじめとする様々な意味でのマイノリティの人たちへの敬意を忘れない社会が生まれている。講師の話で印象的だったのは、そのような社会の在り方が、国民に強い満足感をもたらしているということだった。「多様性とインクルージョン」がしっかりと機能していて、そのことでカナダは確実によりよい社会になってきたという実感が、カナダの人々に明るい未来への期待を生んでいるのだと感じられた。

### 《講演を受けてのグループワークと発表》

質疑応答の後、5人程度からなる小グループに分かれてその内容を咀嚼し、自分たちの社会に引き寄せて考えるためのディスカッションを続けた。成果を発表するための時間を含めて、2日間にわたるグループワークとなった。グループワークは、以下のような流れですすめた。

- ① 講演を聞いて思ったこと、気づいたことを付箋紙に書き出す。
- ② 付箋紙に書いたことをグループ内で共有し、そこから見えてくる「キーワード」は何か話し合う。
- ③ グループが選んだ「キーワード」を全体に紹介し、それを選んだ理由を説明する。
- ④ 「キーワード」について身の周りに関連づけて考える。自分⇒家族⇒友人⇒学校⇒地域⇒社会⇒国⇒世界⇒宇宙…と、それぞれのレベルでその「キーワード」は存在し達成されているか。たとえば「平等」というキーワードについて、自分の中に平等はあるか、家族内では、学校では…、と思いをめぐらす。自分自身の体験やエピソードを紹介しながら話し合う。
- ⑤ グループごとに作業して成果を発表する。グループワークの成果発表は形式自由としたので、模造紙にポスターの形でまとめるグループ、演劇を披露するグループ、大声を出してみせるグループ…、様々な形の発表があった。

## 4. おわりに一参加者の感想など一

UNESCO ユースセミナーでは「多文化共修」を目指してきた。第一印象がその人のイメージをつくるように、ある文化との最初の出会いを取りもつ責任は大きいと感じる。文化、言語、宗教、信条など様々な意味で多様な背景をもつ参加者が「いい出会い」をもてるようにと、ユースチームは時間と労力をかけてプログラムを練ってきている。アートや音楽を取り入れた参加型のアクティビティを多数準備して、「体と心と頭」が総動員されて他者と出会う場を作ってきたつもりだ。食事についても、ムスリムの参加者に配慮してハラール料理を提供しているが、他の参加者にとっても貴重な体験となっているようだ。言語の壁は確かに存在するが、日本語・英語・ポルトガル語の3言語をメンバー間で苦労して通訳しあっている。なんとか伝えよう、なんとか理解しようという苦心と努力自身が、またとない学びとなっているのを感じる。言葉が通じないなら話さない、自分と違うから近寄らない、分からないものはそのままにしておく、といった「スルー」ができない2日間である。

以下に、グループごとのディスカッションの成果報告と、グループワークを終えての感想のいくつかを紹介して本稿を締めくくりたいと思う。

### グループA

選ばれたキーワード：「変化」

世界は変化しているのに、日本はまだ変化を受け入れられていない。たとえば、海外では同性愛に対する理解が高まっているのに日本はまだまだ。周りは変化しているのに。

グループワークの内容：

私のグループでは、社会に対するそれぞれが抱えている不満について話し合った。バングラデシュからの留学生は「外見で差別しないでほしい」、ブラジル学校の生徒は「日本人はなぜ意見を言わないの?」、日本の学生は「個性を大事にしなさいっていうのに、面接はスーツにみんな同じ髪型。そんな個性じゃないし個性はどこにいったの?」という日頃感じている疑問をシェアした。発表のとき、私たちは「叫ぶ」という形で思いを発表することにした。聞き手に届けるためにシンプルに力強く！

### グループ B

選ばれたキーワード：「多様性という言葉はいらない！」

カナダの話聞いて、カナダには「多様性」という言葉は特別に存在すらしないと感じた。なぜなら、カナダには既に沢山の人種や民族が住んでいて、それが当たり前になっているから。グループワークの内容：

グループで話し合うまで、こんなキーワードが出てくるとは思わなかったけど、今はとても納得できている。私たちは、社会が多様化するのではなくその多様性に対して当たり前になりたいと思った。発表では、どうやって多様性という言葉が存在しないまでの状況になるか、という発表をしたが、一人ひとりが宗教や文化の違いを理解し受け止めているから、カナダは多様性を通り越しているのではないかという結論にいたった。

### グループ C

キーワード：「多様性」

大学や会社または友だち同士で、差別や考えの違いについてたくさん話し合ってきたが、実はもっと身近な家族の中で、そのような変化や相違があるのではないかと。

グループワークの内容：

アメリカからの留学生の実体験として、海外では宗教や思想の違いから生まれる親族間での争いがあるということが紹介された。別の話では、留学経験をしたことで考え方や態度が変化し、その変化に納得できない親とのすれ違いがあることも。解決策として、もっと他文化と調和できる環境作りをすることが必要だと話し合った。発表では、それぞれにとっての多様性について、それぞれの定義を紹介し、どのような流れからできるかについてまとめた。

### その他、感想など

・アメリカに留学したとき、隣りに座った知らない人が話しかけてくれた。帰国してみたら、たとえば電車の中でみんなスマホに夢中になっていて、まさに人々が孤立している日本の現状を物語っているように思えた。

・「一つの考えに合わせるのではなく、選択できる自由があり、それを認め合うことが大切」ということが、みんな自然にできたらいいと思った。

・多様性を生むには法律や制度が必要だけど、法律や制度によって新たに苦しむ人を生んでし

まう可能性がある。強い拘束力があるからこそ効果的ではあるけれど、それに反対する人に対しても強制することになるから、それは多様性を排除することにつながるのではないか。

・学校では私は男子と話をするのが苦手で、怖いと思っていた。でもそれは、私が勝手に「差別」していたんだって気づいた。

## 注

- 1) 坂本他(2017)は、「多文化間共修」という言葉を使い、それを説明して「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティ(正課活動及び正課外活動)において、その文化的多様性を学習リソースとして捉え、メンバーが相互交流を通して学び合う仕組み」としている。
- 2) 文科省はインターナショナルスクールや民族学校を「我が国に在住する外国人の子どもの教育を担う教育施設(いわゆる外国人学校)」と呼んでいる。しかし、それらの学校に通う児童生徒の国籍は必ずしも外国籍とは限らず、それらの学校を特徴づけるのは教育方法および言語が海外にルーツを持つ点であることから、筆者は「外国人学校」という呼称を改めて「外国学校」とすることを提唱している。本稿では、以降、それらの学校を「外国学校」と総称する。
- 3) 教養学部がASPUnivNetを通じて委託される「日本/ユネスコパートナーシップ事業」の報告書として毎年発行している冊子。
- 4) 本学の「チャレンジセンター」という組織に所属する学生サークルで、ブラジル学校の生徒たちなど、海外にルーツを持つ子どもたちを支援し、年に数回の「マルチカルチャー・キャンプ」を主催しているグループ。チャレンジセンターは、「社会との繋がりの中での実践的な教育や、国際交流・地域活性・ものづくり・社会貢献など学生が自由な発想で企画したプロジェクト活動」を推進する学生活動支援組織である。
- 5) 横浜シュタイナー学園は、シュタイナー教育という教育学・教育方法を実践するオルタナティブ学校である。ユネスコスクールの中では珍しく、学校教育法第1条の定める正規の学校(いわゆる「一条校」)ではなく、公立でも私立でもないNPO立の「学校」である。日本のユネスコスクールのネットワークには、そのような「非正規」のシュタイナー学校があわせて3校加盟している。
- 6) 本稿は2017年度のUNESCOユースセミナーの報告であるが、すでに開催されている2018年度のセミナーも含めて表にまとめた。
- 7) 性的マイノリティのことを一般的にはLGBTQと表現することが多いが、カナダでは、「two-spirited” な人たち」という先住民族の考え方にならって「2」という文字を加える。

## 参考文献

坂元利子・堀江未来・米澤由香子(2017)『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社